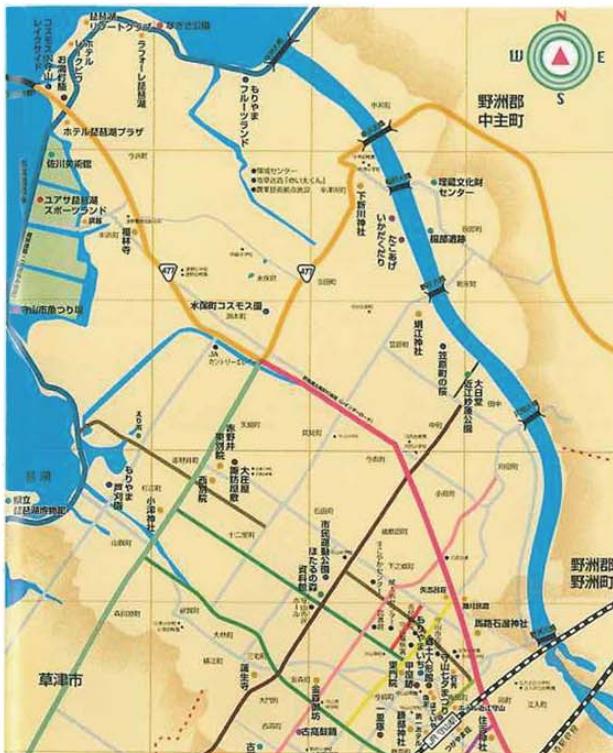




# 近江妙蓮

守山市教育委員会生涯学習課  
参事(文化財担当) 山崎 秀二

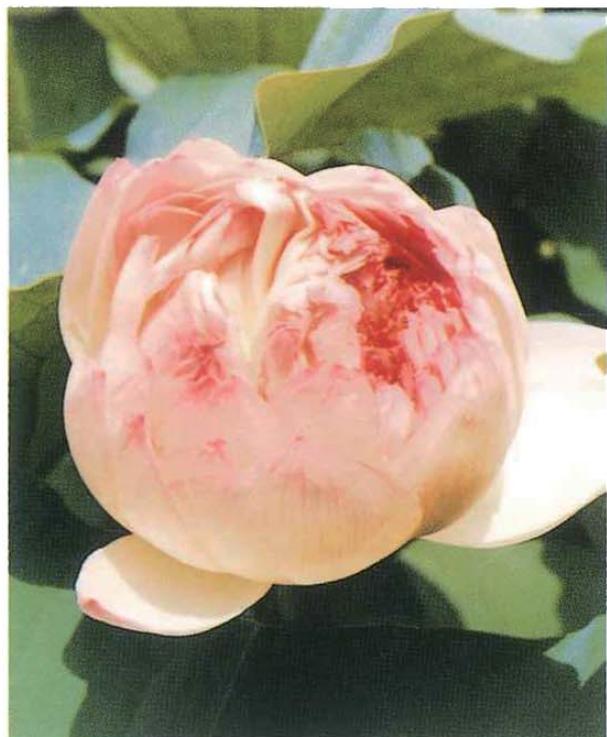


大日堂と妙蓮池位置図

滋賀県守山市中町字堂西には同川田町田中の田中家（現当主 田中米三氏）と近江妙蓮保存会が永年にわたって守って来られた妙蓮と大日池（別名妙蓮池）があります。この池に咲く蓮は1965（昭和40）年に滋賀県の天然記念物『大日堂の妙蓮およびその池』の名称で指定され、また、1975（昭和50）年には守山市の市花として制定されています。毎年、盛夏に人々の目を楽しませてくれる妙蓮について、以下、その植物学的特徴と田中家に伝わる史資料からその歴史を紹介します。

## 妙蓮の特徴

妙蓮は「被子植物の双子葉類の仲間で、ハス科ハス属に含まれる大型水生植物」です。妙蓮の葉や地下茎である蓮根は普通の蓮（常



妙蓮の花

蓮と呼ぶ）と違いはありませんが、花の様子は全く異なっています。

妙蓮のつぼみは常蓮のそれと外観上似ていますが、妙蓮は開花すると150枚前後の外側の花弁が落ち、その後2～数個（伝承や記録では2～12個までの数字がある）の大花弁群が現れます。花弁は大小が密集した状態のため内部を直接見ることはできませんが、花弁をていねいに剥がしていくと、花托やおしへではなく、花弁だけが集まった花であることがわかります。また、常蓮は開花以降花弁が数回開閉するのですが、妙蓮は花弁数が多いので開閉しません。さらに、常蓮は花が散ると花托の中に蜂巣ができるが、種もできますが妙蓮は花托がないことから蜂巣がなく、種もできま



妙蓮の浮き葉

せん。従って、妙蓮の増殖は蓮根だけでおこなわれるわけです。

毎年4月下旬、水面に葉（浮き葉）が現れ、やがて2週間もするとその葉が直径約25cmほどに成長し水面に広がります。そして5月下旬頃になると浮き葉の間から、卷いたままの葉が水面上に伸びてきます。その様子から剣葉とも言われます。この葉もやがて葉を開き（立ち葉と呼ばれる）、成長して池全体を覆うようになります。立ち葉を伸ばすことはハスの特徴であり、太陽光を有效地に受けるためだと考えられています。この立ち葉の大きさは最大で短径約55cm、長径約75cmもあり葉を支える葉柄は直径約7～8mm、長さ約120cmもあります。この葉の中央には直径約1cmほどの白くなった部分があり、天候の良い日に水を溜めてみると水泡が出て沸騰したように見えます。これはハスが活発な光合成を行って、内部から二酸化炭素を放出していることがわかる証拠のひとつです。



妙蓮の立ち葉

溜めてみると水泡が出て沸騰したように見えます。これはハスが活発な光合成を行って、内部から二酸化炭素を放出していることがわかる証拠のひとつです。

ハスは土中に蓮根（地下茎）があり、妙蓮

もこの地下茎で増殖します。蓮根は4節ずつ連なっていて節の結合部分から根や芽がでて成長しますが、通常3月頃には根や芽が準備されます。蓮根の断面は中央に小さな穴があり、その周囲に7～9個のやや大きな穴がありますが、顕微鏡などでみると無数の小さな穴がならんでいます。

妙蓮はよく双頭蓮と同じではないかと言われますが、花の様子を観ると全くことなっています。ひとつは、双頭蓮は2つの花弁群であること、ふたつ目は双頭蓮は花托があり、妙蓮はない、さらに双頭蓮は翌年に再び、双頭蓮となる可能性がないことです。即ち、突然変異なのです。妙蓮も突然変異で生まれた花でしょうが遺伝する花になっています。妙蓮のつぼみは常蓮と比べると長さはやや短い



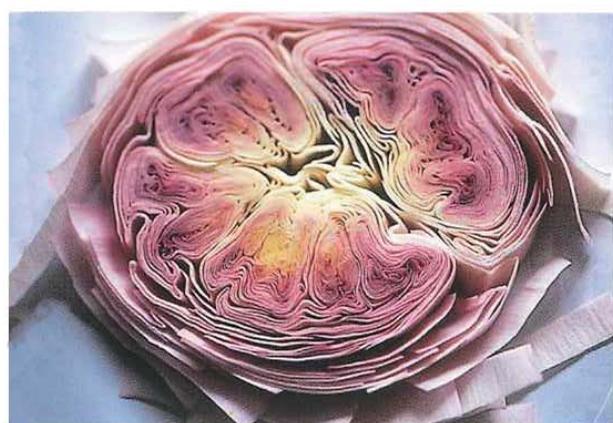
地下茎

ようです。花の違いを縦断面（写真）でみますと、常蓮は外側に8層ほどの花弁が螺旋状についていて、その内側には多数のおしべ群が、そして中央にはめしべと花托があります。妙蓮の外側の花弁は常蓮と類似していますが、おしべ群とめしべ群や花托がなく、すべてが小さい花弁に変化していることがわかります。横断面では花弁が幾つかの群に分かれているようですがよくわかります。つまりおしべやめしべが変化した花弁が幾つかのまとまりとなっているのです。花全体の花弁数は大小総数で2,000～5,000枚とも言われますが、実際に観察してみると、やはり最低でも2,000枚以上

あることがわかり、多いものでは4,000枚以上に達します。



(常蓮) 花の縦断面 (妙蓮)



妙蓮の横断面

妙蓮の花弁群は大花弁群が「一茎三花や四花」と呼ばれる三花や四花であり、この大花弁群がさらに中花弁群、そして小花弁群に分かれることになります。これらの花弁群は大きから小になるごとに花弁の大きさが小さくなり、最小の花弁は米粒ほどの大きさです。

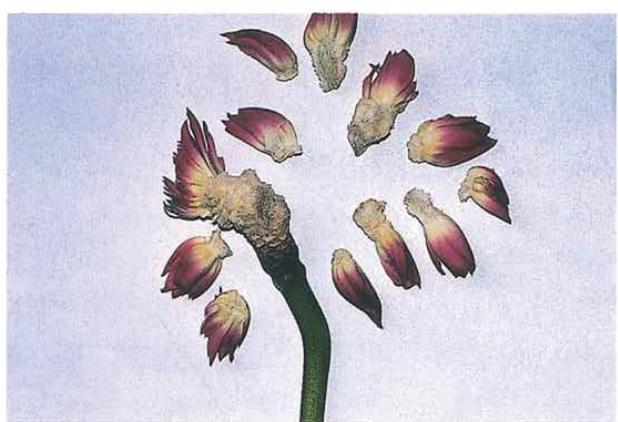
花の時期は天候にも左右されますが、順調なときには7月後半から8月中旬が見頃ですが、成長の時期に高温が続くと早くなり、逆に低温が続くと花が極端に少なく、天候に大きく影響を受けることが過去の記録や最近の花のつき方からわかっています。

後の衰退から再生の項で触れますが、明治28（1895）年以降開花しなくなった理由も天候や気温に影響され、種が絶えたのかもしれません。

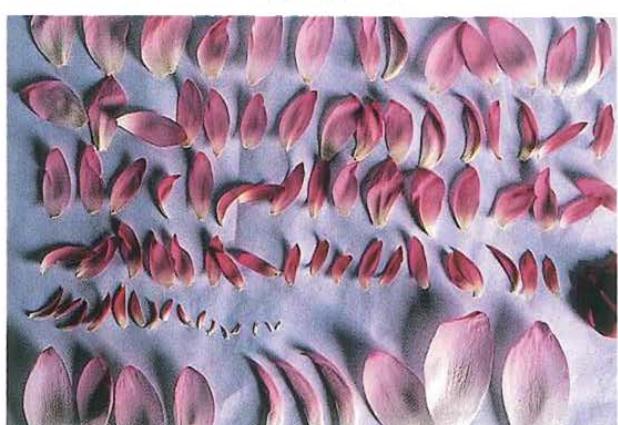
ません。1984年にも全く花がつかない年があり水温の低い川の水が多量に妙蓮池に流入したのではないかと言われました。原因はよくわからなかったのですが、蓮根が病気になっているようでしたので試験栽培用の池を田中米三氏宅の庭にコンクリートで造り、保護増殖事業として妙蓮の蓮根を移植し、水や肥料などの管理が行われました。2年後には試験栽培池や妙蓮池でも無事開花し、現在に至っています。試験栽培池は現在も田中氏宅で種の保存のために残されています。



中花弁群



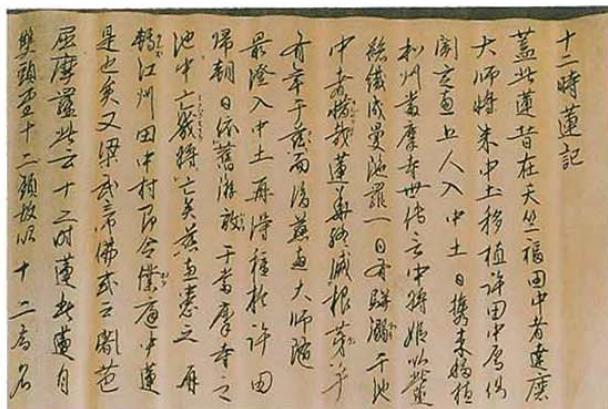
小花弁群



大小の花弁

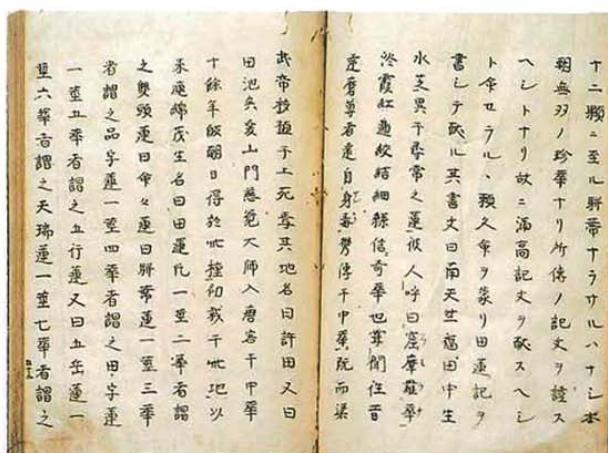
## 妙蓮の由来と古文書

田中米三氏が保存されてきた史資料は約170点もあって大きな二つの桐の箱に納められています。多数の記録類の中に16冊からなる『江源日記』があります。この日記の中に、「応永十三（1406）年に前将軍の足利義満が妙蓮の花を献上した」という記事があり、これが妙蓮の最も古い記録です。



十二時蓮記

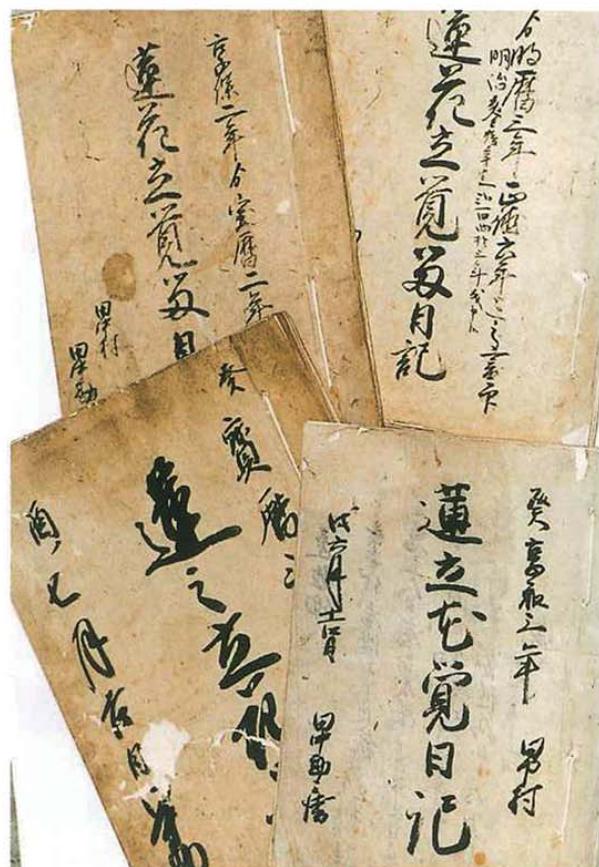
妙蓮の由来を記述した古文書に『十二時蓮記』があります。江戸時代に皇室や将軍家等に献上された時に添付された書状の写しで、内容は「天竺（インド）の福田中に常蓮とは異なる蓮が咲いていて、その蓮を達磨大師が中国に運び、梁の武帝（502～549）に献上了。武帝は許田中に植えて大切にされた。慈覚大師がその蓮を中国から日本に持ち帰って田中に植え、現在に至っている」というものです。



武帝「仏式」

武帝の『仏式』にはこの異様な蓮に名前が

つけられていて一茎二花を双頭蓮又は命々蓮、  
駢帶蓮、一茎三花は品字蓮、一茎四花を田字  
蓮、一茎五花を五岳蓮又は五行蓮、一茎六花  
を天瑞蓮、一茎七花を搖光蓮、一茎八花をを  
八面蓮、一茎九花を上方蓮又は青舌蓮（三国  
伝來双頭蓮という古文書では清舌蓮）、一茎十  
花を十千蓮又は満仙蓮、一茎十一花を瑞拊蓮  
又は吉祥蓮、一茎十二花を十二時蓮又は年光  
蓮一茎十二花を十二時蓮あるいは年光蓮など  
と呼んだことが記されています。



「蓮立花覺留日記」など

明暦三年（1657）から60年間の妙蓮の花の数や天候、農作物の作柄記録を書きとどめた『蓮花立覺留日記』があります。その中には「万治四辛丑年 寛文元年御改元有 此年蓮花一本立不申候 世中殊外不作故 難儀者共多ク有……」や「寛文五乙巳年 此年蓮花百十五本立 麦作吉 田畠共二十年此方豊年申悦申候」などの記事が見られ、田畠の不作年は蓮の花の数が少なく、逆に花が多数のときは豊作であったことを知る貴重な資料です。

『蓮花立覺留日記』と題された享保二年から宝暦二年までの36年間の記録には、例えば「享保十七壬子年此年蓮花一本立不申候作物大麦小麦大不作田畠共大不作 飢死大分有 西国ハ猶々不作故飢死数万人有」という全国的な不作の記録が、また『蓮之立花覺』は宝暦三年から天明二年までの観察記録で「宝暦八戌寅年此年中年也 西本願寺御門跡五月ニ枯花差上ヶ申候 取次八幡町金胎寺度々望被申候付指上ヶ申候 閑院宮様ヨリ申来 八月九日ニ夜通ニテ差上ヶ 明ケ四ツ時御殿持参仕候」等の記事に京都への献上がみられます。他の日記には『蓮立花覺日記』や『永々蓮立花覺帳』が残されていて、各年の花の数、天候や田畠の豊不作や蓮花の献上の記録が細かく書き留められています。

妙蓮は江戸時代に皇室に献上されていたことが、享保十七年七月十八日付けの記録で『禁裏様蓮花奉差上ヶ覺』という古文書に享保十八年～安永九年までのほぼ毎年の記録が残されていることからわかります。他の記録にも京都の後水尾、靈元中御門、桜町などの天皇、あるいは皇族公卿、京都所司代、京都町奉行、西本願寺門跡などに献上されたことがみられます。

その他の献上先では徳川将軍家の秀忠、綱吉、吉宗などの他尾張家、紀伊家、大名では加賀藩主綱紀や膳所藩主、大溝藩分部家などがあり、献上先からのお礼の書状、詩歌も残されています。

### 妙蓮の衰退と再生

室町時代からの記録を持つこの妙蓮がどのような原因か良くわからないまま、1895（明



治28）年を最後に一つも花を咲かせなくなりました。このため1926（大正15）年、田中が所属する河西村の村長を会長とする『大日堂ならびに蓮池保勝会』が設立され妙蓮の再生を願う賛同者を集めました。

その後1958年、田中源兵衛と田中常尚氏（兩人とも故人）が蓮の研究者大賀一郎博士を招請され、大賀博士による妙蓮の再生研究が開始されました。最初は博士が探しあてた富山県安居寺の妙蓮（これは金沢市持明院から移植されたもの）を田中に移植しましたが咲いたのは常蓮ばかり（安居寺の妙蓮が常蓮と共生していて移植されたのが常蓮の蓮根であった可能性がある）でした。加賀妙蓮と博士が名付けた金沢市の持明院の妙蓮が1958年に事情があって移転するため、博士がこの持明院の池の蓮を東京都府中市の自宅に移植して栽培し、その蓮根を1960年、田中の妙蓮池に再移植されました。1963年までの約5年間博士は田中米三氏宅や田中常尚氏（元近江妙蓮保存会長で故人）に手紙を送り、妙蓮の開花状況を心配されています。移植後しばらくは咲かない年が続きましたが、1963年、実に68年ぶりに17個の花がつき、復活しました。

持明院の妙蓮は江戸時代に加賀藩主が田中の妙蓮を移植したことがほぼ確実であることから、里帰りをしたことになります。博士は田中家の調査と妙蓮の研究成果について『近江妙蓮から近江妙蓮へ』の報告書を刊行しています。そして地元田中では復活以降、近江妙蓮保存会を結成され現在に至っています。

近江妙蓮の名は大賀一郎博士が、越中妙蓮、



『永々蓮立花覺帳』



大賀一郎博士 (1883-1965)

市修景池、  
東大緑地植物実験所にある武藏妙蓮が伝わっています。なお中国には湖北省玉泉寺に千弁蓮と呼ばれている妙蓮とそっくりの蓮が伝えられていますので、伝承のとおりであれば、さらにインドや中国に妙蓮が密かに伝えられているかもしれません。

1997年、守山市が近江妙蓮公園を整備し、公園内に資料館を建設しました。また試験栽培池として瑞蓮池をつくり1997年3月に保存会が妙蓮の蓮根を移植しました。通常なら植えた年は開花しないと考えられていましたが、その年の夏には妙蓮池より少し遅れて花をつけ、妙蓮の種の保存がされました。1998年は各地で異常気象が報告され近江妙蓮公園内の瑞蓮池の蓮も5~6月の気温が高かったせいか大日池(妙蓮池)よりも早く、しかも多数の花がつきました。

※本文は『守山市誌自然編』及び自然編の『資料編』を元に記述し、写真は守山市誌編纂室の中川原正美先生、近江妙蓮保存会、守山市公園緑地課から提供を受けました。

加賀妙蓮、  
武藏妙蓮など各地に所在した妙蓮にそれぞれの旧国名を頭に冠した名称ですが、越中妙蓮は絶滅し、現在では加賀妙蓮、府中



一茎三花



一茎四花



一茎五花



近江妙蓮公園(奥は資料館、手前が瑞蓮池)

滋賀文化財教室シリーズ No.179号

発行年月日 1998年9月25日

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2  
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525